

市民記者が行く! 広報サポーターレポート



室町の天王祭 「鳥居ゆすり」 厄男たちが勇壮に鳥居を振るう



広報サポーター
長谷輝夫さん(室町)

私の地元、室町天王神社で行われている「天王祭」についてレポートします。
7月第2日曜日に開催されて



徳川家康の父、松平広忠より奉納されたと伝えられている「三つ葉葵の紋」を付けた法被をまとい、鳥居を大きく揺さぶる厄男たち。全てのちょうちんの火が消えるまで振り、その後鳥居を担ぎ、場内を威勢よく回っていました。



いたこの祭礼は、西尾祇園祭と日にちが重なることが多くありました。しかし、今年から第3日曜日に行うことになったため、天王祭をゆっくり見ることができました。

この祭りの起源は古く、室町時代の末(約450年前)までさかのぼります。当時疫病の大流行があったため『尾張津島神社』の分霊を祭りしました。大鳥

居を持って町内を練り歩き、これに触れる者をなぎ払うことにより疫病をも払う奇祭として現在に伝えられています。
この分霊を祭る「中屋敷」という地名を地元では「天王」と呼んでいるのも、古くから祭礼を大切にしてきたことを物語っています。
式典を下屋敷の岡田宮司宅で行い、県道西尾吉良線を獅子舞や、花火を出しながら800メートル先の天王広場へ進みます。昔は鳥居を振るいながら勇壮剛毅に練り歩いていましたが、現在は交通安全に配慮し、天王祭り場とその周辺のみで鳥



▲世帯の数だけでもされるちょうちんが、祭り情緒を盛り上げていました。

居ゆすりを行っています。また、疫病除けとして白飯で、小豆の入らない赤飯「コハメシ」が振る舞われます。天王祭り場では25歳と42歳の厄男たちが、ヒノキの太い丸太でできた鳥居の白提灯に火をともして疫病を払うために前後に力強く振ります。
4・5回振るうちに火は消えます。その後、鳥居を横にして境内をぐるぐる回ります。この鳥居ゆすりは「美しい愛知づくり景観資源600選」に指定されており、他の津島神社やその分霊を祭っている地域で行われていることはなく、大変珍しい祭りといえます。
広報サポーターは公募により選ばれた市民記者です。これから市民の目線で市内各地のイベントなどを取材していただきます。